

## CURES Report

## 社会運動史における「数の問題」

——『石川県社会運動史』を読んで——

林 宥 一

昨年1月、石川県社会運動史刊行会が20年の歳月をかけた『石川県社会運動史』が出版された(能登印刷出版部)。本文616頁に加えて年表と本書に登場する1,000名以上の人名索引が付いた大著である。9名の執筆メンバーで書かれた本書の構成は、次のとおりである。

## 第一編 黎明期の石川県社会運動

序章 一向一揆と百姓一揆 / 第一章 概観 / 第二章 自由民権運動 / 第三章 明治社会主義と初期の労働運動 / 第四章 米騒動 / 第五章 尾小屋鉾山労働者の闘い / 第六章 思想・文化運動

## 第二編 戦前・高揚期の石川県社会運動

第一章 概観 / 第二章 無産政党と労働運動 / 第三章 全協支部の活動と五・二三弾圧 / 第四章 全農支部の設立と農民運動 / 第五章 能登における農民運動 / 第六章 住民運動の展開 / 第七章 文化・学生運動

## 第三編 フェシズム期の石川県社会運動

第一章 概観 / 第二章 新興仏教青年同盟支部の運動 / 第三章 文化運動 / 第四章 人民戦線事件と戦時下の抵抗

一向一揆と百姓一揆をあつかった第一編序章は、近代社会運動の前史と位置づけられて叙述されているが、以下は明治維新时期から第二次大戦終結にいたる戦前社会運動が対象とされている。個々の論点について言及する余裕はないから、全編を通読して得られた評者

の独断的な感想のみを述べることにしたい。

評者は、本書を読みながら、E・H・Carrが「歴史というのは、相当の程度まで数の問題だ……普通の状況なら、歴史家は不満を抱く一農夫や一村落のことを知る必要はありません。しかし、何千という村の何百万という農民が不満を抱くとなりますと、これはいかなる歴史家も無視しない一要素であります」と述べて、「歴史では数が大切です」と指摘していたのを思い出した(『歴史とは何か』)。

Carrの指摘を思い出したのは、社会運動への参加者の数が気になっていたからである。そこで、本書に登場する社会運動を「数(規模)の問題」として点検し直してみると、1712年の大聖寺藩一揆が数千人、1869年のぼんどり騒動が2～3万人の規模、1883年の能美郡負債農民騒擾が約1,500人の参加、1907年の遊泉寺鉾山の労働争議は抗夫が800人(新聞報道1,500人)、1918年の米騒動は金沢だけでも2,000～3,000人、1920年代前半の尾小屋鉾山争議では1920年の第一次ストが400人、第二次ストが680人、1922年の第一次ストは1,500人近く(官憲資料は500～600人)、といった状況である。いま、ここに挙げた「数」は、いずれも、第一編「黎明期の石川県社会運動」に記されているものである。

ところが第二編になると、4ケタを超える運動への直接参加者「数」は発見することができなくなる。この編で見出されるのは、

1922年の小松製作所のスト参加者140名、1929年のメーデー 300人、翌30年のメーデーが600人（これが石川県メーデーにおける戦前最大規模）、1930年の錦華紡績賃下げ敵首反対ストの300人、といった「数」であり、これが全協石川支部や全農石川県連など労働・農民運動組織の組合員となると、いずれも3ケタを超えない。

社会運動の規模＝「数の問題」としてみれば、明らかに第二編は第一編よりも劣る。だが、それにもかかわらず、この第二編は先の目次にみられるように石川県社会運動の「高揚期」と位置づけられている。また、この編の第一章には「高揚した県下の社会運動」という一節が設けられている。これはなぜか。

本書はこの点について、必ずしも明示的な叙述を行っていない。だが、注意深く、そして、全体として本書をみ直してみると、その根拠は暗黙のうちに示されている。それは第一に、運動への直接参加者の数は少なくても、民衆の間に運動参加への潜在的な可能性が存在していたという認識である。断片的ではあるが、このような認識の一端を示す文章もみられる（「〔世界大恐慌下で〕大規模な労働争議がいつでもおこりうる情勢にあった」283頁）。

しかし、第二に、より特徴的なことは、第二編の「数の問題」での劣勢にもかかわらず、この時期には社会運動の質が発展しているという暗黙の了解が成立しており、それがこの時期を「高揚期」とする根拠となっているのではないかと考えられることである。この質とは何か。それは社会主義運動（または革命運動）としての社会運動ということである。評者の本書に対する読み方にまちがいがないければ、本書は全体として明らかに社会運動の社会主義運動への発展という視角をもってい

るのであって、「数の問題」にもかかわらず、第二編が「高揚期」とされる根拠はここにあるようにみうけられる。

このような視点から本書全体をみるといくつかの問題点が指摘しうる。

第一に、社会運動において「数」が1ケタちがうということは小さな問題ではなく、きわめて重要な問題である（組合運動など少しでも現在の社会運動にかかわった体験があればこのことはすぐわかる）。したがって、「数の問題」にもかかわらず運動が高揚しているという認識は、思想史はともかく社会運動史の次元では、そう簡単に成立しえない筈である。

なお、先の恐慌期における民衆の運動参加の潜在的可能性という認識は、当時の左翼陣営にみられた「革命情勢」論をそのまま引き継いでいるものであって、それがリアリズムを欠いた主観的な情況判断であったことは、今日の現代史研究でひろく確認されていることである。

したがって問題は、第二に、「にもかかわらず」ということではなく、「数の問題」として社会運動と社会主義（思想）運動の関連をとらえ直す必要があるということである。このような視点から本書の「高揚期」の運動をみると、そこには、「黎明期」の4ケタの数字にみられた社会運動からの一定の断絶が感じられる。一揆にしろ、米騒動にしろ、尾小屋鉾山争議にしろ、それらの4ケタ、5ケタの運動には、どこかでSocialな（Gesellschaftlichな）性格が付着しているのに対して、2ケタやせいぜい3ケタのSocialisticなそれには、むしろ「社会」からの乖離・遊離がみられる。この点をいま詰める余裕はないが、少なくともこのような点からいえば、評者は本書を読んで第二編の運動を「高揚期」の社会運動と考えることはできなかった。い

ずれにせよ、「数の問題」はどこかで運動の質の問題とつながっているという認識が社会運動史には必要である。

本書は、「戦時下石川県労働者の反戦のたたかい」は、決して大規模なものでも、はなばなしいものでもなく、また、明確な組織や計画をもった人民戦線運動でもなかった。しかし、その強靱な根は、石川県社会運動史の不撓の基盤と伝統を残したのである」(616頁)という叙述をもって終っている。ここにも、「しかし」(にもかかわらず)という認識が表われている。だが、「大規模」でもなく、「組織」も弱く、「計画」も不明確な運動で、どうしてそれが「不撓の基盤と伝統」たりうるのか。この「しかし」は論理的にも前段の文章に全く反する接続詞である。正しくは、「したがって」戦争への抵抗にはなりえなかった、とつながるのであって、そのような事実認識から社会運動の質を問い直す方法的態度が求められているのである。

第三に、本書の特徴は文化運動の叙述にかなりのページが割かれていることである。本書に付せられた人名索引の大半はこの運動にかかわった人々であって、読者はその豊富さ、多様さに驚かされるであろう。これは、執筆者の多年にわたる発掘の結果という側面もあるが、石川県地域における一つの大きな特徴とも考えられる。ただ欠点は、上に述べたことと関連するが、その豊富な多様性が無数の点となって散在しており、それが一つの「社会」という面に結実していないということである。

このような文化運動の場合、留意しておく必要があるのは、社会運動が直接外的な社会関係に働きかけてこれを変えていこうとする性格をもっているのに対して、文化運動は、そのような社会運動に対して順・比例的に連

動している場合と、逆に、社会運動の閉塞性ゆえに個人の内的な面に向かって展開される場合がみられるということである。換言するならば、社会運動の原因としての文化運動ということと、社会運動の結果としての文化運動(いわば社会運動に対する文化運動の両義性)の区別の問題であるが、後者の例は本書のうちにもしばしばみうけられる。例えば、「抑圧され緘口令をしかれた民衆が、せめてものハケ口として『我々の文芸』を要求する」という宣言(562頁)とか、「青い夜聖書を繙く / かつてエホバの歌を謡う / 亡国の民へブライの歎き / 『シオンを追憶ひ出でて涙流しぬ / エルサレムよ / エルサレムよー』と…」という作品とか(565頁)、「われわれは芸術に対して何を求めているか、それは正しく美の一字に尽きる。我々の瑣末的な日常生活の中に繰り返される喜、怒、哀、楽の情の極地はすべて『生きている』と云う美しさに満ちている」(579頁)とかいう作品などにみられる「文化」のベクトルは、社会運動のそれとは明らかに逆である。このように文化運動は社会運動に対して両義的な関係を有しているのであって、このような視点からきわめて豊富なこの地域における文化運動を整理し直してみると、興味深い論点が再発見できるかもしれない。

いずれにせよ、本書は社会運動という題名のもとに、労働運動、農民運動、住民運動、学生運動、社会主義思想運動、文化運動、宗教運動などを混然一体のものとして描き出している。ここで書いたような方法的な疑問も残るが、この多様さが本書を興味深いものにしていく要因であり、それはまた、対象地域そのものがもつ可能性とも読める。

(金沢大学経済学部助教授)